世界を能動的に体験するひと夏

アートの現場から ACAC通信

青森公立大学国際芸術センター青森では、16日から景観観察研究会（通称：景観研）による「八甲田大学校」を開催する。八甲田のふもとに位置する豊かな自然環境のなかで、芸術と科学の区別なく、自然と人間の関係、共存するための術について考えるプログラムになりそうだ。

景観研は、絵画、版画、写真、フィールドワークをもとにした活動を行うアーティスト4人（OJUN、板津悟、新津保建秀、山本修路）と、寄生虫学や森林生態学を専門に自然をフィールドとする研究者3人（筏井宏実、伊勢武史、大庭ゆりか）からなるグループだ。2018年頃から活動をはじめたが、元々はアーティストと研究者が興味関心を交換するサークルのようなもので、会合を開いたり、学際的な活動をまとめた冊子を作るといった活動を続けてきた。それぞれのジャンルで長年不動の地位を築いているメンバーばかりだが、景観研として展覧会を行うのは初となる。

景観研の呼びかけ人として、今回の「八甲田大学校」でも中心的な役割を担っているのが、作家の山本修路だ。現代美術の活動として酒造・鳩正宗と協働し、地域住民との米作りから日本酒「天祈り」を手掛けていることでも有名な、青森県十和田市と埼玉県を拠点とするアーティストであるが、庭師としてのバックグラウンドも持つ。

普段から山本が手掛けているのが、国産の木材を用いた小屋や茶室、屋台などの製作であり、今回もすべての作品に山本が関わり、躯体や展示台、ギャラリー内に置かれる机やイスなどにも木工スキルを余すところなく発揮している。

昨年から世界情勢の影響でウッドショックが起こり、木材は価格高騰のイメージが強いが、国産の木材を使うことによって日本の豊富な森林資源を有効活用することになり、ひいてはそれが山林の適切な維持や災害防止にもつながっていく。本展で使用している木材も、会期終了後は十和田に運ばれ再利用される予定だ。

ACACで山本は、日中、スタッフとともに木工作業に勤しみ、日が暮れると工房にこもって油絵を描いている。樹木の個性をそれが生息する景観とともに描くのが常だが、今回は八甲田のブナ林を描いている。これに加え、今年4月に青森県立美術館コミュニティギャラリーで行われた「Aomori Spring Sprout展―青森春に芽吹く光」に出品した《青森県立体地形模型》の再制作、北前船をはじめとした江戸時代からの日本の林業の歴史や道具を知ることのできる展示スペースなど、山本だけでも盛りだくさんの内容だ。

作品や展示は、鑑賞者に能動的に見て考えてもらえたらと思っているが、本プログラムでは展示だけでなく、ワークショップやトーク、公開制作などが毎週のように行われ、それにより展示自体も変化していく。ぜひ景観研メンバーと一緒に時間を過ごし、自然を通じて、世界をあらためて体験してみて欲しい。

（青森公立大学国際芸術センター青森学芸員　慶野結香）